

Zoom を用いた情報モラル教育の実践

Report on Practical Information Ethics Education Using Zoom

水越 綾

MIZUKOSHI, Aya

1. はじめに

2019年12月、WHOへ原因不明の肺炎発生が報告された。その当時は誰もがここまで広範囲に感染が拡大し、影響を及ぼす事になるとは想像していなかったのではなかろうか。その原因不明の肺炎、つまり新型コロナウイルス感染症（COVID-19）は国境を越え広がり続け、2020年1月国内において1例目となる感染が確認された。感染の猛威は世界中に広がり、2020年3月11日にWHOがパンデミックを宣言、国内でも4月27日に新型インフルエンザ等対策特別措置法に基づく緊急事態宣言が発出された。

企業活動や市民生活においては政府・地方公共団体から、通勤ラッシュの回避、学校の休校、イベント自粛、不要不急の外出を控える等の要請がなされ、本学においても入学式の中止、新年度授業開始時期の延期等の措置が講じられ、新入生や在学生とはオンラインや郵便を通してのやり取りが行われる事となった。

自粛生活が求められ、自宅で過ごさなければいけない状況の中、学生達にとってICTによるつながりが貴重なコミュニケーションツールとなった事は想像に難くない。本学の学生達も大いに活用していたと考えられる。

若者にとってICTによる繋がりとは特別なものではなく、むしろごく当たり前のコミュニケーションツールであると考えられる。実際本学に入学してきた新入生達も、自宅待機期間中SNSを通して新入生同士繋がったり、先輩と繋がったりしながら情報を得ていたと話してくれた学生もあり、単に既知の友人とコミュニケーションを取るためにSNSを使うのではなく、状況に応じて必要な人と繋がり、情報を得る為のツールとして活用している学生もいる。

18歳前後の若者がSNSによる繋がり、コミュニケーションに慣れてきている世代であるという事は、平成

30年度情報通信白書¹⁾からも分かる。この調査結果によると、個人のインターネットの利用目的として最も多かったのがメールの送受信、「ソーシャルネットワークワーキングサービス（SNS）」の利用、動画投稿・共有サイトの利用、無料通話アプリやボイスチャットの利用が挙げられており、このようなコミュニケーションツールを使う割合は13～39歳の利用率が高くなっている。

しかし、このようにSNSに慣れた世代ではあるとは言え、総務省総合通信基盤局電気通信事業部消費者行政第一課が2019年度に実施した青少年のインターネット・リテラシー指標（ILAS（Internet Literacy Assessment indicator for Students））等に係る調査結果²⁾によると、過去4年間の調査の中でセキュリティリスク（ID・パスワード、ウイルス対策等）の正答率が相対的に上昇している一方、不適切利用リスク（過大消費、依存、歩きスマホ、マナー等）、有害情報リスク（不適切投稿、炎上、閲覧制限等）の正答率が相対的に下降している事が報告されている。そして、インターネット利用時間も増加しているという報告がなされている。

平成27年版情報通信白書³⁾では、SNS上でのトラブル経験の有無を問う設問において、全体の8割以上がトラブルに遭ったことはないと回答しているものの、年代が下がるほどトラブルにあった人が増える傾向が見て取れる。20代以下ではSNS利用者のうち26%が何等かのトラブルにあった経験を持っているという結果が出ている。

これらの情報から今年度、遠隔授業から新生活をスタートさせる学生達にとっても、ICTは既に使い慣れたツールではあるものの、「他者」を意識した活用、またその情報の真偽を判断し、活用する事には慣れていないのではないかと考えた。そして、このコロナ禍で遠隔でのコミュニケーションが更に増えてゆく事を

想定した時に、オンラインでのコミュニケーションのあり方について意識させておく必要があると考え、筆者が担当している必修科目「情報演習」「コンピューター基礎」において、当初12回目以降に予定していた情報モラルについて学ぶ時間を初回に移動、実施する事とした。本レポートはその実践報告である。

2. 本授業について

筆者が担当している大学1年生必修科目「情報演習 I」及び短期大学部1年生要履修科目「コンピューター基礎 I」は、コンピューターの使い方やアプリケーションの使い方（Microsoft Office Word、Excel、PowerPoint）や情報モラルを学ぶ演習科目であり、本来であればPC教室で実際にパソコンを使いながら実施される。

しかし、コロナ禍の影響により、予定通り授業を実施する事が困難となった事から、本科目においても5月下旬より遠隔で授業を実施する事となった。しかし、非常事態宣言解除後は学生の学習環境や履修状況に応じて、遠隔・対面で授業を実施した。

3. 情報モラル教育への取り組み

3-1. 実施概要

下記の通り、授業第1回目から4回目までを情報モラル教育に充てた。

実施期間

令和2年5月22日～6月12日

各クラス週1回実施

対象者

令和2年度1年生および再履修生

（大学（服飾学科・表現学科）、短期大学部）

全256名

実施概要

上記期間中週1で授業実施（各クラス4回）

第1回目：講義

身近なトラブルについて（レポート）

第2回目：アイスブレイク・自己紹介

グループ分け、テーマ決め

グループワーク

第3回目：グループワーク

第4回目：発表、振り返り（レポート）

実施目的

オンラインで他者とコミュニケーションを行う上で気をつけなければいけない事や意識する事等を実践を通して理解する。

3-2. 第1回目（講義）

総務省総合通信基盤局消費者行政第一課が発行している「インターネットトラブル事例集」⁴⁾を参考資料としながら、身の回りに起こり得る事例を挙げ、遠隔で講義を実施した。授業は録画ではなくZoomを用いてリアルタイムで実施。通信環境が良くない学生もいるという事を考慮し、講義は録画し、授業終了後に学修ポートフォリオシステム manaba 内に設けられた科目ごとのスペース（マイコース）内から期間限定で講義動画を配信をし、授業に参加できなかった学生へのフォローをおこなった。講義の後、「インターネットトラブルとしてどのような事があり得るか」「自分や周囲で起こった事」などを振り返ってもらい、学生達にとってオンラインでのトラブルがどれほど身近に存在しているものなのかを探った。

その結果、こちらの予想以上に実に多くの学生が自分自身あるいは、周囲で何かしらのオンラインでのトラブルの経験があるとのコメントがあった。

具体的な内容を挙げると、まず、自分自身が体験したトラブルとして、オンラインのサービスやアプリに登録した事によって頻繁に送られてくるようになった迷惑メールやメッセージ（14件）⁵⁾。SNSで他者とコミュニケーションを取る中で誤解が生じてしまい、トラブルに発展してしまった。あるいはトラブルになりそうになった（11件）、悪口やいじめ（7件）、個人情報漏洩（4件）、健康被害（1件）、なりすまし・のっとり（5件）。知らない人からの執拗なDM・ストーリー（6件）。売買、金銭、グッズ交換に関するトラブル等（14件）が挙げられた。

また、友人など周囲で起こったトラブルとして、売買・交換等に関するトラブル（28件）、なりすましやのっとり（22件）、個人情報漏洩（21件）、コミュニケーションのすれ違いから生じたトラブル（16件）が多く挙げられた。

これらの回答から、実に多くの学生が身近なところでインターネットトラブルを経験しているという事が分かった。

これはまさに2019年度 ILAS (Internet Literacy Assessment indicator for Students)⁶⁾の調査結果が示している通りで、本学の学生も有害情報リスクへの意識がまだ不十分である事が考えられる。そして、オンラインにおける他者とのコミュニケーションの取り方を

理解してゆく為の学習機会が必要である事が考えられる。

従って、今回実施する取組みは履修者にとって有益な経験・体験であり、必要性が高いという事が明確となった。

3-3. 第2～3回目（グループワーク）

第2回目からはいよいよグループごとに課題に取り組んでもらう事になる。

1クラス30名前後（短期大学部は1クラス15名程度）の履修生を3、4名のグループに分け、課題に取り組んでもらう。この取組みを通し、履修者にはオンラインで他者と円滑にコミュニケーションを取る事の大変さ（彼等にとって何気なくおこなっているオンラインでのコミュニケーションではあるが、実は非常に神経を使う行為であり、お互いに相手を思いやる気持ちが対面のコミュニケーション以上に必要である）に気付いてもらう事を目的としているが、履修生は本学に入学後、一切顔合わせの機会が無い状況からの授業スタートであった為、どのようなクラスメイトがいるのかさえも分からない。つまり、殆ど面識の無い仲間同士で共同作業を行なってもらう事になるので、グループによっては共同作業自体が上手く進められない可能性があると考えられる。従って、今回の課題に入る前にZoomのブレイクアウトルーム機能を活用し、クラスをランダムにグループに分け、自己紹介やおしゃべりをしてもらうという事を2度程繰り返し、彼等の緊張をほぐす時間を設けた。その後、再度ランダムにグループに分け、先程のフリートーク同様、自己紹介やおしゃべりなどのアイスブレイクからスタートさせ、次にグループリーダーの選定をおこなってもらった。その後、全員ブレイクアウトルームから戻ってもらい、くじ引きによって、各チームのテーマを決定した。課題テーマはチーム毎に異なるように前出した「インターネットトラブル事例集」から、学生達にとってより身近な問題だと考えられる7項目（1）悪ふざけなどの投稿、（2）SNS等で悪口や仲間はずれ、（3）スマホの過度な使用による日常生活への支障（心身的な影響）、（4）ネットでの危ない出会い（ネットで知り合う人とのやりとりについて）、（5）著作権（他人の権利を侵害しない為に気を付けること）、（6）オンラインショッピングやフリマアプリでのトラブル、（7）SNS マナーを選んだが、人数が多いクラスは、テーマを追加したり、同じテーマで取り組んでもらった。

各チームは、与えられたテーマに沿って実際の事件や問題をリサーチ。そして、自分たちがそのような問

題に巻き込まれないようにする為には、あるいは未然に防ぐ為にはどうすれば良いかを考えてもらい、まとめてもらう。

基本的にはグループ毎に設定したZoomのブレイクアウトルーム内で作業を進めてもらう事にはしたが、学生達の通信環境が様々である事から、LINE等のSNSを用いての共同作業も許可した。教員は各グループのブレイクアウトルームを回って進捗状況を確認したり、必要があれば助言を行なった。

しかし、各グループはそれぞれのやり易い環境で共同作業を進めている事から、全チームの進捗状況やチームに属する個人がどのような思いでグループワークに取り組んでいるかが見えにくい（中にはグループワークに不安を抱いている学生がいる事も考えられる）。

従って、各チームの進捗状況を把握する事と、学生個人の様子の把握とサポートも考え、授業毎進捗レポートを学生に課した。

非常事態宣言が解除された令和2年6月以降は、教室内に於いて対面でグループワークを実施するチームも出てきたが、感染予防に十分に注意しながら作業を進めさせた。

3-4. 第4回目（発表（対面、遠隔）、振り返り）

グループ毎に、テーマに沿ってまとめ上げたものを発表してもらった。遠隔クラスはZoomでスライドを共有し、チーム毎に発表をしてもらった。対面クラスは教室で、混合クラスはチーム毎にZoomと教室で発表をしてもらった。

発表後はグループワークへの取り組みについて自分がどのように関わったか、他のグループの発表内容から気付いた点等の振り返りをおこなった。

その振り返り（回答数 大学：206名、短期大学部28名 計234名）から、68%の学生が積極的に今回のグループワークに関わったと回答、28%の学生が頼まれたところだけ関わったと回答している。（表1）

そして、なぜそのような答えたのかと理由を問うたところ、積極的に関わったと回答した学生からは以下のような回答が挙げられた（以下回答コメント原文まま掲載）。

「初めから進んで役割決めなどの相談をみんなにしたり、こうしたらどうか、と言ったりなど積極的に取り組んだから。」「会話が途切れた時に話し合いが進むような発言を心がけたから。」「最初は任せていた部分が多かったのですが、後半は自分からアイデアを出したり、改善点を言えたりしたからです。」「資料の打ち込みや、内容の相談など、今自分が持っているスキ

ルをフル活用して製作にかかわった。」「グループに URL を貼ったり、話し合いに積極的に参加したからです。」「話し合った内容をメモしてグループのみんなに共有して、書き漏れがないかどうかをしっかりと確認していったからです。」「最初そのテーマから大まかに流れを決めて、どんな感じに進めていくかの話し合いに積極的に参加しました。」「調べて、これいいなと思ったものを LINE グループに送ったりした。」「みんな自分の分担だけではなく、意見を出し合って、個別のテーマを決めたりしできたからです。」「ライングループを作ってやりました。インターネットで積極的に調べて意見を出しました。分担などの意見も出せた方かなと思います。」「LINE のグループを作ることなど自分から提案することができたから。」「グループメンバーと質問しながら分からないことを一人じゃなくてメンバーと調べながら進めることができたからです。」「分担や内容についての話し合いにも積極的に参加して話し合いを進め、自分の発表の分担もきちんとこなしたからです。各自調べたことの情報共有も自発的に行いました。」「自発的に意見を出すことができたし、発表練習や打ち合わせにも計画的に取り組んだから。」「授業以外に集まって自分が作ったものと他の作ったものを見比べてまとめた。」「話し合いを進める際に、積極的に自分の意見を出したり、皆の意見や話がまとまるようにメモをとったりして進行したからです。最初のグループワークの1時間でもいい感じにまとめることができたので余裕を持って準備できました、発表でもスムーズに相手がわかりやすく、聞きやすいように簡潔に発表出来たのが良かったです！」

また、頼まれたところだけ関わったと回答した学生からは、「私は自分の仕事を完成していて、まとめに対しても意見を提出しました。」「日本語に自信がないので、グループメンバーが漢字の読み方や難しい日本語の意味を教えてくれて助かります。自分の頼まれたところを良くするために、私の部分しかしませんでした。」「頼りすぎではよくないと思い、スライドに関するグラフ、文章について積極的に意見を出すように意識した。」「SNS マナーやトラブルについてネットで調べて、ネチケットという言葉を見つけ、そのテーマをメインに班で調べることになったので、そこに関しては積極的に関わったと思うけれど、PowerPoint に関しては分からないことが多かったため、ほぼ丸投げしてしまったから。」「みんなで項目ごとに分担し、自分の担当の部分はしっかりできたと思ったからです。」「パワーポイント制作は結構関わられたと思いますが、発表時はあまり関われなかったように感じたため、この選択にしました。」「テーマについて調べて

案を出したり、こう書いたらわかりやすいのではないかなどといった PowerPoint に関する事は積極的に行いましたが、発表時は Zoom 参加だったからです。』といったような理由が上がっており、頼まれたところだけ関わったと回答した学生でも、自分ができるところに対しては積極的に取り組んでいたことが窺える。

そして、半数以上の学生達が「限られた期間で完成できるよう、制作スケジュールを考えて作業を進め（表2）、積極的にアイデアを出しながら（表3）、最終的に第三者が見た時に分かりやすい内容になっているかを意識しながら取り組んだ」（表4）事がうかがえる。

「あまり関わっていない」、「殆ど関わっていない」という学生は通信環境が原因によるもの、欠席してしまっただけという理由によるものであり、グループワークに対してどれくらい関わったかは、それぞれの環境にもよるところが大きい事が考えられるが、多くの学生が関わる努力をして取り組んだと考えられる。

表1. 今回のグループワークはどれくらい関わりましたか (N=234)

1. 積極的に関わった	2. 頼まれたところだけ関わった	3. あまり積極的に関わっていない	4. ほとんど関わっていない
159	62	11	2

表2. 制作スケジュールを考えて、制作を行った (N=234)

1. かなりあてはまる	2. あてはまる	3. あてはまらない	4. あまりあてはまらない
87	113	19	15

表3. 皆でアイデアを出し合った (N=234)

1. かなりあてはまる	2. あてはまる	3. あてはまらない	4. あまりあてはまらない
133	91	4	6

表4. 第三者が発表を見たときに、わかりやすい内容なのかを意識した (N=234)

1. かなりあてはまる	2. あてはまる	3. あてはまらない	4. あまりあてはまらない
71	146	10	7

また、今回の取組みを通して、「オンラインでの“コミュニケーション”について気づいた点、今後意識(気をつけよう)しようと思ったことを書いてください。」という設問に対しては、かなり神経を使い、他者を意識しながらグループワークに取り組んでいた事が想像

されるようなコメントが多く見られた。以下にコメントの一部（原文まま）を挙げると、

「待つだけじゃなく、自分が出来ることを積極的に探ることが大事だと思いました。自分からアイデアを沢山だしてこうと思いました。」「対面してコミュニケーションをとるよりも高度なのでより人の話を集中して聞く事や自分から発信することが大切だと思いました。」「伝わりづらいので、言葉を丁寧に伝えることを心がけた」「伝え方に気をつけないと、自分が伝えなかったことと違うことが伝わったりしてしまうので、言葉をちゃんと選んで伝えようとおもいました。また、細かい説明なども入れると、より伝わりやすいとおもいました。」「やはりオンラインでのコミュニケーションは直接コミュニケーションをとるより誤解を招きやすく、問題が起きやすいということを感じました。今後は自分の言動により注意深くし、文字だけでコミュニケーションをとる際はよく考えて慎重になりたいと思います。」「相手の顔が見えない中でのやり取りなので、相手がどう思っているのかをしっかりと考えたいので発言することを徹底したい。」「いつもより人の話をしっかりと聞くことが大切だと思います。」「一度黙ってしまうと沈黙が続いてしまうので、気軽に発言できる空気作りが大切だと思った。」「オンラインで伝えにくい事が沢山ある為、分かりやすいように意識しないといけないと思った。」「声が伝わらない分、感情も伝わりにくいので文脈で勘違いされないように今までより一層気をつけようと思った。」「それぞれ人によって受け取り方が違うということを再確認しました。顔が見えない分、伝え方に気を付けてゆきたいです。」「こまめに連絡をとり、どう作るのかを考えて作りたいのとコミュニケーションを取らないと何をしたらいいのか、不安になるし相手にどう思われているのか、オンラインだと分かりにくくて、表情が読めないのが難点だと思いました。」「複数人で作業するのに、分かっていない人がいるままで進めないように気をつける。」「他者の話を聞くときに、いつも以上に反応(リアクション)をはっきりするようにした。」「遠隔でも顔を見ながらコミュニケーションを取ることが大切だと思った。」等、コミュニケーションに関する気づきや工夫コメントが多く見られた。

そして、遠隔で意思疎通してゆく事の難しさにあらためて気づき、対面コミュニケーションの大切さに気付いたという者もいた。

他には、「今回の取り組みを通して、自分自身のオンラインコミュニケーション、SNS活用について考え直した。」「実は身近なところに危険が潜んでいるという事に気付いた」というコメントのように、自分自

身のオンラインとの関わり、使い方を振り返るようなコメントも見られた。

これらのコメントから、今回、殆ど相手が分からない状況でのグループワーク体験を通して、オンラインでコミュニケーションを取る事の難しさを実感できた有益な機会であったと考える。

4. 今回の取り組みから気付いた点と追加調査

今回の取り組みでは、学生達にオンラインでのコミュニケーションの難しさを意識させる事ができ、有益な取り組みであったと考えるが、第1回目講義に課したレポートや4回目を実施した振り返りレポートから、実に多くの学生が何等かのトラブルを経験しているという事実が見えてきた。先にも述べたとおり、コミュニケーションのすれ違いが原因となるトラブル、SNS上で知り合った人とのトラブル、金銭トラブルなどが特に目立つ内容であった。

それはつまり、多くの学生が大学生になる前から積極的にSNSやオンラインのサービスを活用しているという事であり、今時の若者にとって、オンラインツールやオンラインでのコミュニケーションは日常のごく一部として定着していると考えられる。

そこで、今後の取り組みの為にも、もう少し彼等の利用実態を調査しておく必要があると考え、前期授業最終日にSNS利用についてのアンケートを実施した（回答数：大学186名、短大24名 計210名）。

調査の結果では、殆どの学生がSNSを利用しており（表5）、具体的にはLINE、Instagram、Twitterを利用している学生が多い事が分かった。（表6）更にSNSの種類毎に用途を使い分けていること（表7）、学生によっては1つのアプリケーションの中でも相手や目的等に応じて複数アカウントを作成して使い分けているという学生もいた（自由記述回答より）。

具体的な使い分けとして、Instagramは情報収集（ファッションや芸能人、食べ物、趣味等）を目的としているという回答が多く見られた。複数のアカウントを作成し、ジャンル毎に使い分けているという回答も目立った。また、情報を収集するだけでなく、写真投稿などの発信も行い、相互コミュニケーションツールとして活用している学生もいる。その設定は、仲の良い限られた友人とのクローズドなコミュニケーションの場として活用していたり、あえてオープンにしていたりとも様々である。他に自分自身の思い出記録用に写真を投稿しているという回答も見られた。

TwitterもInstagram同様、情報収集やコミュニケーション手段として活用しているようである。そし

て、趣味や目的別に複数のアカウントを用意して使い分けている学生がいる。しかし、Twitterは写真が主というよりもつぶやきが主であることから、一口に情報収集といってもInstagramとTwitterの用途は異なり、目的によって使い分けている事が考えられる。

LINEはアプリ内のサービスを使ってニュース等を閲覧していたり、暇つぶしに友人と話す事もあるという回答もあったが、連絡手段として活用しているという回答が殆どであり、特に必要な事のみやり取りする為に利用しているという回答が目立った。

Facebookは、あまり積極的に使われている様子ではない。他のアプリやWEBの新規登録の際に必要なためアカウントを持っているだけという回答が目立った。

その他のSNSとして名前が挙げられたアプリケーションも連絡手段として活用しているという回答が多く見られた。

SNSの利用頻度はコロナ禍以前と比較して高くなったという回答が多く(表8)、その理由として「自粛の為外出できないから」、「暇つぶしの為」、「情報収集の為」、「動画を見るようになった」から、「友人とSNSでのやり取りが増えた」、「学校の課題や学校からの情報を得る為」という理由が挙げられた。逆に見なくなったという回答の理由としては、「学校の課題で忙しくて見る時間がない」、「もともとSNSは友人と会っている時におこなっていたので、外出できない今は殆どしなくなった。」「外出できないので情報収集する必要がなくなった」、「投稿する写真がない」という理由が得られた。

また、オンラインでの出会いについては(表9)、半数程の学生が経験があると回答しており、そのきっかけとしては同じ趣味や好きな芸能人など共通の嗜好が挙げられている。

そして、その後実際に会い(表10)、コンサートやライブ等のイベントに行ったり、食事(お茶なども含む)、遊んだり交友関係を広げているようである。

このように積極的にSNSを利用していれば当然の事だと考えられるが、半数の学生がSNSを嫌だと思った経験も持っているようだ。(表11)

その理由としては、誹謗中傷、悪口など相手の事を考えないようなネガティブな投稿を目にした時、返信や反応が面倒な時などにSNSがイヤだと思うようである。

オンラインショッピングは実に多くの学生が経験している。(表12)よく使うショッピングサイトとして、具体的に67程のサイト名(ブランド名)が挙げられたが、中でもAmazon(72)ZOZOTOWN(71)楽天市

場(32)が多かった。(表13)

オンラインショッピングでのトラブル経験者は全体の(7%)と少ない割合であった(表14)。具体的なトラブル内容として、サイズや色が違う、商品自体が別物、不良品が届いた、商品が届かない、といったトラブルを経験しているようである。

またフリーマーケットやオークション等での売買も64%の学生が経験しており(表16)、うち5%の学生が出品経験がある(表15)との事である。トラブルに巻き込まれた学生は5%程いるようである。(表17)

表5. SNSを使用したことはありますか (N=208)

はい	206
いいえ	1
無回答	1

表6. あなたが使っているSNSサービスを教えてください。(複数回答あり) (N=208)

1. Instagram	196
2. Twitter	181
3. LINE	200
4. Facebook	17
5. 他 (WeChat, WEIBO, カカオトーク、TikTok, YouTube, QQ, スニーカーダンク、メルカリなどネットショッピングアプリ、BAND、スナップチャット)	18

表7. SNSによって活用を分けていたりしますか (N=208)

はい	171
いいえ	34
無回答	3

表8. コロナ禍以前と比較してSNSの利用頻度の変化はありましたか (N=208)

1. 頻度が高くなった	51
2. やや高くなった	49
3. コロナ禍以前と変わらない	93
4. やや少なくなった	8
5. かなり少なくなった	6
6. 無回答	1

表9. SNS上で面識の無い人とのコミュニケーションを取り、仲良くなった人はいますか (N=208)

はい	114
いいえ	93
無回答	1

表10. SNS出会った人と実際に会った事はありますか (N=208)

はい	86
いいえ	75
無回答	47

表11. SNS が嫌だなど思ったことがありますか
(N=208)

はい	112
いいえ	95
無回答	1

表12. オンラインでショッピングをした事がありますか
(N=208)

はい	191
いいえ	14
無回答	3

表13. 良く利用するショッピングサイトを教えてください。
(上位10位のみ表示) (複数回答あり)

	サイト名	回答人数
1	Amazon	72
2	ZOZOTOWN	71
3	楽天市場	32
4	メルカリ	15
5	Qoo10	10
6	SHOPLIST	7
7	Base	6
8	BUYMA	5
9	Taobao (中国)	4
10	韓国の通販サイト	4

表14. オンラインショッピングでトラブルに巻き込まれた事がありますか
(N=208)

はい	15
いいえ	189
無回答	4

表15. オンラインフリーマーケットに商品を出品した事
がありますか
(N=208)

はい	111
いいえ	97

表16. オンラインフリーマーケットで売買取引をした事
がありますか
(N=208)

はい	136
いいえ	63
無回答	9

表17. オンラインフリーマーケットでトラブルに巻き込まれた事
がありますか
(N=208)

はい	10
いいえ	198

5. まとめ

授業後に実施したアンケート調査から、多くの学生が SNS を活用し、他者とコミュニケーションをとっており、積極的にオンラインを活用している事が分か

る。

平成30年度情報通信白書のソーシャルメディア利用状況の国際比較の結果からは、我が国では「他者とのつながりを得るためにソーシャルメディアを利用するというよりも、情報の収集や、暇つぶし的手段という受け身の利用をすることにメリットを感じる傾向にあるといえる」という報告がなされているが、今回調査した学生達も SNS を情報収集や暇つぶしに利用するという学生が多かった。しかし、中にはオンラインを通して他者と繋がるという事を経験している学生もいる事から、SNS 利用の在り方も広がってきていると感じている。

また、その SNS の活用に関しても、一つのアプリケーション内でも複数アカウントを保有し、ジャンルや目的別に情報収集を行っているという事から、自分達にとって必要と思われる情報を得る為に、SNS を活用している事が分かる。

NHK 放送文化研究所が2018年に実施した調査結果⁷⁾では、全体の31%、20代では44~45%が「知りたい事だけ知っておけばいい」という感覚、「情報源は少なくてもいい・情報収集には時間をかけない・情報を見比べない」といった傾向があるという事を報告している。情報過多時代を生きる若い世代にとって、「知りたい事だけ知っておけばいい」という傾向が見られるのは、当然なのかもしれない。

しかし、オンラインで情報をキャッチしたり、他者とコミュニケーションを取ってゆく事は、今後も更に一般化してゆく事になると考えられ、「情報の正確さを判断できる力」「相手に誤解されないよう情報を発信する力」更に、「自分の好みや嗜好に偏らず、情報をキャッチして読み取れる力」が必要になってくると考える。

仲の良い友人、自分と趣味の合う仲間、何かしら共通性のある仲間と繋るだけではなく、考え方や意見が異なる他者と意思疎通を図らなければいけない機会も今後出てくるであろう。

その為にも、自分の趣味や趣向に偏らず情報を収集し、客観的に情報を判断できる力を伸ばしてゆく必要があると考える。

つまり、自分と同じような興味関心を持つユーザーとばかり繋がる事によって、自分と同じような意見ばかりが返ってくるような状況「エコーチェンバー」⁸⁾の影響、オンライン検索履歴を分析・学習するアルゴリズムがそのユーザーが見たい情報を優先的に表示する事によって、ユーザーが興味を示していない情報は遮断されたような状況（フィルターがかかったような状態）となり、自分の価値観の「泡（バブル）」の中

に孤立してゆく現象、「フィルターバブル」⁹⁾による情報の偏りを意識させる事の必要性も今回の調査からおおいに感じた。従って、これらを学生達に意識させる機会を設定する必要性、また、思いのほか金品のやり取りに関わるようなトラブルに遭った学生が多かった事から、オンラインでの取引に関する注意を促す機会等も今後の情報モラル教育の取り組みに組み込んで行く必要性を感じた。これらの事を踏まえ、今後の授業への取り組み課題としてゆきたい。

註

- 1) 平成30年度版 情報通信白書 第4章 ICTによるインクルージョン促進 第2節 ICTによる「つながり」の現状
<https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h30/pdf/n4200000.pdf>
(2020_10_23 last access)
- 2) 2019年度 青少年のインターネット・リテラシー指標等に係る調査結果
(2020年7月 総務省総合通信基盤局電気通信事業部消費者行政第一課)
https://www.soumu.go.jp/main_content/000698472.pdf
(2020_10_23 last access)
- 3) 平成27年度版 情報通信白書 第4章 暮らしの未来とICT 第2節 ソーシャルメディアの普及がもたらす変化
<https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h27/pdf/n4200000.pdf>
(2020_10_23 last access)
- 4) インターネットトラブル事例集 (2020年度版)
総務省 HP
https://www.soumu.go.jp/main_sosiki/johotsusintokei/kyouiku_joho-ka/jireishu.html
(2020_09_23 last access)
- 5) 迷惑メールの部類には、架空の当選メール、副業のお誘い、海外からのメールが日に何十通も届くといった事が挙げられている。迷惑メールやメッセージはインターネットトラブルの類に含まれるものではないが、ネットサービスやアプリに個人情報登録した事によって、その後大量に不要なメールが送信されてくる事をトラブルと捉えているようである。
- 6) 2) に同じ
- 7) サイカル journal (NHK)
STORY “知りたい情報” だけで十分ですか?
NHK 放送文化研究所

- https://www.nhk.or.jp/d-navi/sci_cul/2019/05/story/story_190517/
(2020_09_23 last access)
- 8) 笹原和俊 (2018) 『フェイクニュースを科学する』 (同人書房)
第3章 見たいものしか見えない情報環境
一 嘘がこだまする部屋
エコーチェンバーとは 82頁
 - 9) 令和元年度版 情報通信白書 第1章 ICTとデジタル経済はどのように進化してきたのか 第4節 デジタル経済の中でのコミュニケーションとメディア
イ フィルターバブル 103頁
<https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/r01/pdf/n1400000.pdf>
(2020_11_07 last access)